



国労せんだい

No. 2626
2012年5月15日
発行責任者 大沼 元
編集責任者 武田 昌仙

- 4・25 安全問題を検証する集会（仙台・郡山）
- 5・12 12春闘総括会議

尊い命を奪われないために

宮城・福島で安全問題を検証

地方本部は4月25日、仙台市民センターと郡山ビックアイにおいて、「安全問題を検証する日」として集会を開催した。

この取り組みは、7年前の05年4月25日に発生したJR西日本福知山線での脱線転覆事故（死者108人、負傷者562人）や同年12月のJR東日本羽越線での脱線転覆事故、翌06年1月のJR西日本伯備線での脱線転覆事故など立て続けに発生した重大鉄道事故に鑑み、06年から開催しているもの。

仙台集会

集会に先立ち、全員が黙祷を捧げた後、地本大沼委員長は「二度とこのような惨事を繰り返さないために、利用者と働く社員の側に立った安全対策や会社施策を求



検証内容を報告する電協千葉議長

めていくとして、06年10月に安全問題プロジェクト会議を設置。以降、支社内の事故について各職協の協力を得て調査・研究し、改善に向けた団体交渉を実施してきた。会社の言う『究極の安全』をスローガンだけに終わらせないよう、活動の強化を図る」とあいさつ。職場報告として、電気協議会千葉議長から「飯山線大根原踏切事故」についての詳細な経過内容と分析、また同様の踏切支障事故が発生した場合の、会社対策問題点と課題について報告がされた。

続いて運輸協議会石塚議長は、「東日本大震災後の職場問題」として、新潟・福島豪雨（只見線の壊滅的打撃）により露呈した会社



運協石塚議長

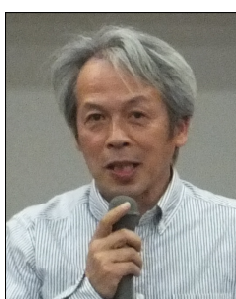
の危機管理の不十分さと具体的問題点の検証をおこなった。また、福島原発事故に対する会社の「無対策」について批判し、今後も対策を求めていくとした。

郡山集会



電協大橋事務長

同日に開かれた郡山での集会では、電気協議会大橋事務長が飯山線踏切事故の問題について、事故発生の背景と要因について説明を行なった。その上で、「解雇処分」という形で責任を全て現場労働者に押しつける会社の姿勢を批判。加えて「机上の対策」と言われている「仙支総2882号」の問題点を明らかにした。



工務協小松山事務長

また工務協議会小松山事務長は、放射能問題について、昨年の福島第一原発事故以降の福島県支部の取組みを中心に報告。

特に、支社交渉と本社交渉の経験をしている小松山事務長は、「何もしない」態度の会社に「怒りを通り越しやりきれない気持ち」を吐露しつつも、線量測定の実施と除染・除去対策、社員の健康管理について引き続き会社を求め続けていく決意を明らかにした。

◆地本安全問題プロジェクト会議は、この間①協力会社社員労災死亡（挟まれ・感電）②羽越線脱線転覆③リフティングジャッキ作業④アクセス線ワンマン運転⑤保守用車事故・設備不良⑥トロッコ線張替作業時の労災死亡⑦線路閉鎖取扱⑧災害・異常時の取扱い等の事故や事象についての問題を取り上げ議論。団交では会社で事故の原因と対策を明らかにさせてきた。また会社での誤りを正し問題の改善に結びつけてきた。

今後もタイムリーに関係機関と連携し、調査・研究、運動作りを進めていく。

住民の足を守れ

ため、「採算が合わない」だけでは廃線の理由にならないのである。加えてJR東日本は「指針に定められる事項については、従来から十分留意しつつ事業運営を行なっており、今後も当然配慮して行く方針である。よって、この指針の存在が当社の経営の足かせになるとは考えていない」と明確に答弁している。

岩泉線は、1982年に「赤字ローカル線」として廃止される予定であったが、全県挙げての「廃止反対」運動により、1984年に「廃止対象路線から除く」ことを運輸省が決定した。

まさしく岩手県民の要求が廃止を阻止したのである。

「オール岩手」で支えてきた岩泉線の廃線を絶対に許してはならない。万一これを許せば、昨年の豪雨災害で今も一部不通になっている「只見線」も廃線の対象になりかねない。

JR東日本が政府に約束した姿勢を堅持するのであれば、廃線より「早期復旧」の立場を取るべきである。

JR東日本の言う「安全対策費130億円」は、JR東日本会社の内部留保金3兆2千億円の約0.4%であり、復旧は十分に可能だ。

地元の要求は「鉄道での復旧」が圧倒的であり、JR東日本には、東日本大震災で被災した線区の早期復旧と合わせ、岩泉線の鉄道での復旧を明確に表明することが求められている。

我々国労は「地方交通線廃止反対」の立場を明確にしている。国民の足・住民の足をいかに守るのが国労の運動であり、岩手県民や地域の方々との協力・共同の闘いが早急に求められている。

【投稿者 佐藤勝地本対部長】

岩泉線廃止は約束反古

岩手県岩泉町で2010年7月に発生した脱線事故により、全線運休が続くJR岩泉線【茂市（宮古市）～岩泉（岩泉町）38.4km】について、JR東日本は3月30日、鉄道での復旧を断念することを正式に発表した。JR東日本の廃線表明は、1987年の国鉄分割・民営化以降、新幹線の並行在来線を除いて初めてだ。

JRは、①岩盤の崩落や落石の可能性がある地点が多数あり、この安定対策に130億円が必要②同線の運賃収入が840万円で、1キロ当たりの1日平均乗車人員は46人（いずれも2009年度）でJR東日本の在来線67路線中最下位であり、これ以上の存続には株主に説明がつかないと説明した。

だが「赤字だから廃線にする」という主張だけでは国民的に、とりわけ地域の利用者は納得がいかないのではなか。またこの対応は「JR会社法」からしても成り立たない。

なぜか。そもそもJR東日本会社は「旅客鉄道株式会社及び日本貨物鉄道株式会社に関する法律＝JR会社法」の適用を受けていた。

その後、概ね順調な経営成績をあげているとして、国は本州3社（JR東・JR東海・JR西）をJR会社法から除外した。

だが、国交省は本州3社が完全な自由経営になることを懸念し、改正附則により国交大臣が「本州3社が配慮すべき指針」を定めたのである。

そしてその一部に「輸送需要の動向その他の新たな事情の変化を踏まえ、現に営業している路線の適切な維持および駅その他の鉄道施設の整備に当たっての利用者の利便の確保に関する事項」がある



青年部！の皆さんが勢揃い

どうかもつひと踏ん張り

ようこそ！青年部のみなさん

地方本部は4月22・23日、松島町・ホテル大観荘において「福祉問題学習会及び慰労会」を開催した。

会議には、12年度と13年度の退職予定者52人のうち、既に昨年参加した対象者を除いた23人が参加し、退職後の諸制度等について学習した。

シニアに関する諸制度とエルダー社員制度については地本五十嵐書記長が説明を行い、「みなさんは、まだまだ現役です。もうひと踏ん張りの活躍を期待しています」と激励のエールを送った。

また曝露してからの潜伏期間が非常に長く退職後に発症するケースが多い「石綿業務災害」についての説明は、地本中島副委員長（地本アスベスト対策委員長）が行なった。

続いて交通共済からは、東北支所佐藤事業副本部長から60歳以降の再雇用者・

退職者の各種共済利用についての説明がなされた。

更に鉄道退職者の会仙台地方連合会から亀山事務局長が、「みなさんは会社では最高齢の扱いだが、退職者の会では青年部です。よろしく！積極的な参加をお願いします」と勧誘した。

東北ろうきん佐々木営業部長の話で学習会は閉じられ、全員で記念撮影を行なった（上写真）。

第二部の慰労会では、40余年に亘る「鉄道人人生」の起承転結が随所で披露され、時が経つのも忘れて懇親を深め、互いに労をねぎらった。

退職のお知らせ

4月15日付

藤沢 琢磨さん
貨物宮城分会

長い間お疲れ様でした

お知らせ

○エルダー組合員激励交流会

日時 5月27日（日）13時

会場 仙台市・シルバーセンター和室

○地域間・エリア異動者激励交流会

日時 6月2日（土）11時45分

会場 大井町駅東口 日本海庄や

○アスベスト問題学習会

日時 6月9日（土）13時

会場 青葉区中央市民センター

情報ビッグアップ

東北工事事務所分会
「ろばた」No.920
12年4月6日より

来てほしくない日、3月11日が過ぎ去った。時間の脅威を感じてしまう。

あの日、JRビルの6階から外に避難して、15時ころ交差点の公衆電話から家と息子に連絡を取ろうとダイヤルしていた。全く通じなかった。後ろに並んでいる人のことを気遣って5分くらいであきらめた。

再度並んで15時20分ころダイヤルを回していた。通じなかった。津波到着時刻である。この一年は、あまりにもいろんなことがありすぎた。人と会うことが苦痛になり塞ぎ込みそうになるときが長く続いた。何かをやつていなければ、頭のなかは息子に支配されてしまう。

ある人は「亡くなった身内の数が一人だけならまだいいほうだ。両親を亡くした子供もいる」と慰めてくれた。だが、自分にとってはそういう問題ではない。この受け入れがたい現実と向き合っている。生き続けていくことに、失った家族の数など関係ないと思っていた。

「49日」が過ぎて、お袋が動けなくなった。たぶん息子の死から気を張つ

笑顔を取り戻してきています

ていたのが、一気に気落ちしてしまつたのだろう。

6月には宮古消防署の慰霊祭があった。10時の開会の挨拶と同時に震度5強の地震が発生、集まつた消防署員はそれぞれ配置につくため会場から去つていった。

津波警報のアナウンスとサイレンが鳴らされ、どこかで火事が発生したらしく消防車が出動していった。たぶん、それは3月11日の光景と同じだったと思わせるあわただしさだった。

回った。見つからない。そのうち出てくるだろうと探すのをあきらめた。次の日の早朝になつても出てこないため、いつもの散歩道を歩いていつてもみると国道の橋の路面の一部が血痕で染まっていた。まさかと思ひ橋の下をのぞくと、そこには胴体がまっぺたつちにちぎれた愛犬の姿があった。変わり果てた愛犬を抱きかかえて帰宅した。

いまだに行方不明のままである。生と死の境はなんだつたのか知りたい。報道された内容は事実とは全く異なつたものだった。テレビ局に文句を言つたら、担当のディレクターがわざわざ家に謝りに来た。

先日、家族みんなで息子が津波に襲われた現場に出向いた。倒壊した家はきれいに片付いていたが、復興には程遠い現実があつた。

身心（みこころ）を

打ち砕かれた3・11

忘れがたきは3・11

その後、何度か「慰霊祭」に呼ばれた。そのたびに涙を流していた。もう行きたくないと思つてしまひ、いつしか行くのをやめた。

8月14日「初盆」を迎えた。息子が飼っていた愛犬「アルフ」をつれて墓参りをした。家族そろって夕食をすませ庭で孫たちが花火をしていた。来客もあり家の中は忙しかった。ふと、アルフがいな

と外に電氣をつけて探し

と大きくなつたら遊ばせてやろうと考えていた。大切に育ててやらなければならぬ家族の一員であり、ショックは大きかった。何かにすがりたい。

仏壇とお墓をリフォームすることにした。やり場のない憤りがストレスとなつていく。

「朝ズバ」で息子の救急現場が再現報道された。現場に居た患者を含めた7人のうち消防士2人が奇跡的に助かった一緒に居合わせた警察官1人は

みんなは一人のためにの言葉どおり、この一年の間、多くの組合員皆様から励まされ、また多なる義援金を各関係機関からいただくなど、言葉では言い尽くせない感謝の気持ちで一杯である。

11月には愛犬アルフの代わりに子犬がやつてきた。息子の嫁と娘2人の私に対する気遣いで買つてきたようである。また、孫が一歳半になるうとしていく。

日に日に息子の幼いころに似てきて、その孫と子犬から元氣をもらい、家族みんな笑顔をとり戻してきております。近況を報告して支えていただきたこの一年間のお礼にさせていただきます。

ありがとうございます。